Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

「音楽教育におけるミュージカル」

佐　藤　敦　子
（福島女子短期大学）

Ⅰ．はじめに

本学合唱クラブの活動は87年度（昭和62年度）より，一般科目の選択授業である音楽演習の中に組み込まれる事になった。その単位認定の取得方法は，２年間合唱クラブに在籍し，放課後のサークル活動に年間を通じ30回以上出席，さらに一年に一度行われる定期演奏会に参加する事とする。そこで87年度の定期演奏会は，第一ステージに「フィーリング」，「いい日旅立ち」，「まっかな秋」などポピュラーな曲を演奏し，第二ステージにはミュージカル・ギリシャ悲劇「エレクトラ」を上演した。本学でミュージカルを上演したのはこれで三度目である。本稿では87年度の「エレクトラ」を中心に，音楽教育の中にミュージカルを取り入れる事について考えてみたい。

Ⅱ．ミュージカルの導入

ミュージカルとはアメリカで発達した舞台芸術の一分野でありオペレッタの流れを汲む。これは一つのストーリーを台詞と歌と踊りで展開させて行き，劇的に重要な部分を台詞から歌唱に移行させたり，うたいながら踊りに入ったり，全員の合唱と共に群舞が入ったりして場の雰囲気を高揚させ盛り立てている。それではオペラ・オペレッタとミュージカルの相違は何か，今何故ミュージカルなのかという点に触れてみたい。

それはオペラやオペレッタがベル・カント（美声）でなければならないという点であり，素晴らしい肉声の響きとそのテクニックに酔いしれるという点である。音楽がドラマより優先し，名歌手の誕生が必要だった時代である。しかしミュージカルは必ずしも名歌手を必要とはしていない。音楽よりドラマが優先し，うたって，踊って，芝居の出来るエンターテイナーが必要とされる。オペラやオペレッタのような単純なラブストーリーだけでは満足出来なくなっているからだろう。現代社会の深淵，画一的でない数々の人間の諸要素などオペラの手法ではその表現が無理なのである。オペラの会話は歌唱のみにより，歌唱によって語られるがよく聞き取れない。大仰なアリアの表現はいかにもわざとらしい。その点ミュージカルは音楽的な処理が自由であるし，さらに話し言葉によるストーリーの展開は，書き言葉から解放された耳慣れた日常会話で人情の機微や，複雑なテーマに肉薄する事も可能になる。ミュージカルは現代に適している。

Ⅲ．作品の選定（作品選定の条件）

(1) 上演に長時間を要さない作品（30分～１時間程度）
(2) 合唱を主体としている事
(3) 女子部員のみである為に，登場人物の配役が可能である事
(4) 舞台装置・照明がホールに適している事
(5) 衣裳製作が可能である事
(6) 長期の練習に耐え得るだけの内容と構成である事

以上の条件に適する作品として「エレクトラ」を取り上げた。これはまた，86年度に上演したミュージカル・ギリシャ悲劇「オイディプス」の成功と脚本家・作曲家としての遊佐端二氏（現在浦和明の星女子高等学校教諭）の技量に深い感動と共感を覚えた為である。遊佐氏の作品は83年に日本オペラ台本募集に入選した「月毛」を始め「オーディション」「オイディプス」など多数ある。今回提供を受けた作品はソポクレスの「エレクトラ」とサルトルの「蠅」を合体させたものである。

Ⅳ．製作過程

次に上演までの製作過程について述べてみたい。

(1) 上演作品の決定，楽譜・台本の配布（７月上旬）
(2) キャスティングの決定（７月中旬）
(3) ピアノ伴奏者の決定・依頼（７月中旬）
(4) 合唱のパート分け，練習に入る（９月上旬）
(5) 台詞と合唱を合体させる（10月上旬）
(6) ピアノの伴奏を入れ，立ち稽古に入る（10月上旬）
(7) 振り付け・小道具・衣裳の決定（10月上旬）
(8) 舞台装置・照明の決定（10月中旬）
(9) 遊佐氏の実際の指導（10月中旬）
(10) 仕上げの段階に入る（10月下旬）
(11) 第15回定期演奏会（1987年10月24日）

Ⅴ．実　態

① キャスティング

ミュージカル創作の上で重要な意味を持つので慎重に行う。声域や声量などを含め歌唱力があるか，声の質が適しているか，演技力はあるかを考える。また今回の主役のエレクトラ，オレステス，クリュタイメストラの登場人物の性格や肉体的条件にも合う配役を吟味して決めた。またコロスたちは巫女と蠅による合唱（群集）を受け持つ重要な要素である為，コロスの学

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

生各自にも自分の存在に対し，何らかの意味と必要性を持つ事が出来るように方向づけた。

② ピアノ伴奏

ミュージカルにおいて伴奏は重要な位置を占める。今回は全てピアノ伴奏で行った。合唱やソロの部分はもちろん，内容に合わせての効果音も随時必要となる為に演奏技術に加えそのタイミングや即興性など音楽へのセンスも必要とされる。このように音楽的に相当熟練されている他、学生が安心して自分の力を発揮出来る学生の良き理解者である事が望ましい。そこで86年に引き続き本学の保育科の音楽の教員である佐藤聡子氏にその伴奏を依頼した。

③ 振り付け・小道具・衣裳

振り付けはミュージカルの中で最も苦労する部分である。群集劇としてのコロスの処理方法として今回は巫女と蠅を対照的に表現したい為に，巫女は優雅な踊り，衣裳も白で統一し，花を手にしたり髪飾りを着けた。蠅は一転してグロテスクでミステリアスな踊りを考えた。衣裳も黒で統一し目にマスクを着けた。うたいながら踊って優雅さや無気味な雰囲気を出すのである。この時，踊りに捕われるあまりに歌が犠牲になっておろそかにならないよう充分考慮する。この対比させた演出が舞台をより一層盛り上げ，流れに変化を与え聴衆に飽きを感じさせない。

④ 舞台装置・照明

色彩は一切使用出来ず明暗のみであり，ほとんどの部分がボーダーライトの地あかりのままである。只，エレクトラとクリュタイメストラの会話の部分は演技を際立たせる為にスポットライトを当て，光の輪を5つ作り台詞に合わせて自由に動いてもらった。照明はホール側で行う為、2回のみのホール使用時にプランを立てた。このようなギリシャ悲劇の場合、明暗のみでもかなりの緊迫感の出る事や聴衆各自にイメージを持たせる事の出来る事が分った。舞台装置は舞台後方のひな壇三段と前方の二段のみである。

⑤ 演出・監督

指導者が行う。練習のスケジュール・稽古の進め方，キャスティング，スタッフ，舞台の動きに至るまで細部に渡って指導する。舞台ではどんな小さな動きも台詞もおろそかに出来ない。エレクトラのモノローグはもちろん，クリュタイメストラとのからみや殺害される演技，オレステスの登場とエレクトラとの二重唱，コロスの隊形とステージの配置に苦慮した。また演技から歌唱に移る部分，逆に歌唱から演技に移る部分に苦心した。

Ⅵ 結果と考察

(1) 作品選定について

学生は2年続きでギリシャ悲劇を選んでいる。これは遊佐氏の脚本による所が大きいが，古典名作の壮大なスケールを持つドラマ，根源的な人間の在り方など，遠い古代の虚構の世界でありながら，現代にも通じる悲劇を、虚構の世界であるが為に返って自由に演ずる事が出来るという魅力にとりつかれた為であろう。

(2) 学生の連帯感・協調性・信頼関係・責任感・友情が芽生えた

2年生が幼稚園実習・就職試験でいない間それぞれ代役を立てて補い合っていた。また音取りや振り付け，衣裳製作の不得手な学生をお互いにかばい合い助け合っていた。これは1つの目的に向かう団結心と，定演に向けて行った5回の合宿と定演までの長期間に及ぶハードな練習の中から自然と芽生えたものと考える。

(3) 演技力・表現力・創造性が高まった

演技力は台詞の言い方，身振り，仕草，間の取り方など自分なりの表現で自然に振舞えるようになった。その為，エレクトラ，オレステス，クリュタイメストラ，コロスの動きが一体となり舞台がスムーズに流れるようになった。また地べたにはいつくばったり，優雅な身体つきなど身体全体で表現出来るようになった。そして衣裳や小道具も予想以上の力を発揮した。これら事実から，学生の表現力や創造性には限りない可能性の潜んでいる事が分る。

(4) 音楽的能力が高まった

エレクトラの独唱では動きをつけながらも$\dot{A}$や$\dot{G}$まで出るようになったし声量も倍増した。また決して簡単とはいえないエレクトラとオレステスの二重唱もうたえているし，蠅（コロス）の合唱についてもかなり激しい踊りをしながら，ソプラノは$\dot{B}$まで出せるようになったし，ハーモニーも保たれている。これは長期間に渡る発声練習を始めとする歌唱そのものの練習に加え，台詞の発声の仕方，踊りながらもうたえるように柔軟体操やマラソンなどのスポーツも取り入れた為といえよう。次に興味深い事として遊佐氏の発言によれば音楽的能力の高い学生は同時に演技力があるとの事であったが，まさに同感である。さらに定演当日のアンケート結果から，学生の上演したミュージカルは聴衆にも大きな感動を与えている事が分った。

Ⅶ おわりに

ミュージカルを上演する事により学生の持つ多くの能力と可能性を知る事が出来た。今後も音楽教育におけるミュージカルについて考えて行きたい。

NII-Electronic Library Service